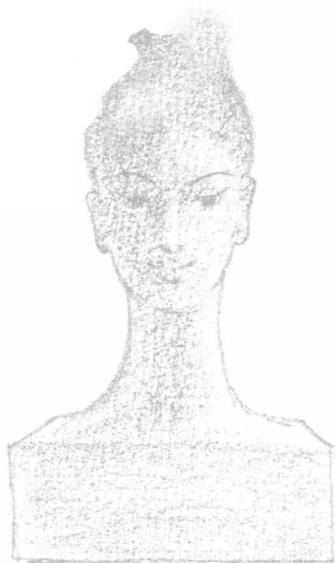


悔いなき煩惱

上卷



上卷
丹羽文雄



新潮社版

悔いなき煩惱上

昭和三十八年六月二十五日 印刷

昭和三十八年六月二十九日 発行

定価 三四〇円

著者 丹羽文雄

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(341)七二二五

印刷・塚田印刷株式会社
製本・神田加藤製本所

長編
小説

悔
い
な
き
煩
悩
(上
巻)

目
次

今様椿姫	・	七
冷却期間	・	二四
故郷の近くで	・	四〇
おせっかい	・	四九
チーズ笑い	・	六〇
やぶれかぶれの別離	・	七三
あと始末	・	八五
四年間	・	九三
再会	・	一〇一
伊賀の家	・	一二

電	話	……	二三
宇津木家	……	……	二三
すすきの穂	……	……	三九
初対面	……	……	一五
出費	……	……	一七四
病状	……	……	一八六
私語	……	……	一九七
早春の湖	……	……	二〇
急変と衣裳	……	……	三七
春林	……	……	三四

装
幀

都
竹
伸
政

悔
い
な
き
煩
悩
(上
巻)

今様椿姫

駒子は廊下つづきの板ばりに、べたりとすわっていた。かまちに腰を下して、靴の紐をむすんでいる江馬政策のチャーコールグレイの服にぼんやりと視線をおいていた。三、四年前につくった服のようである。江馬政策が立ち上った。折靴をもち、片手にかなり時代物のバナマの帽子をつかみ、さて、というふうに駒子をながめやった。駒子は顔をあげなかった。白髪めだった六十歳を越えた顔が、おいそれと適当なことばも思いつかないらしく、当惑した。それを無視するように駒子は顔をあげなかった。江馬政策は、この女にあたえた打撃の深甚さをいまさらに感じるらしかった。が、それは一応片がついているのだ。駒子のはっきりと承諾をしたわけではなかったのだが、こちらの意志をつたえたということで、一応ことは終ったといってもよかった。

「それでは、これでおいとまします」

駒子がだまって、顔をさげた。江馬政策は顔をまたいだ。

格子戸はあけはなされたままである。木の門までの踏石に靴音がのこった。その音は、申訳のなさで心をいためているようにもきこえたが、はやくこの場からのがれたがっているようでもあり、しかし、靴音はゆっくりきこえていた。木の門についているくぐり戸があいて、しめられる物音がそれにつづいた。とうとう最後まで顔をあげなかった駒子は、門のそばのえにしだが葉をいっぱい茂らせているのを思った。切迫した感情の中で、えにしだを思い出すなど、どういう気まぐれだったろうか。しかしすぐ駒子は、先に門を出て行った常之が、途中で父親を待っている光景を思った。

駅まで、静かな住宅地がつづいている。夜のことであり、往来もあまりないであろう。ぶらぶら歩きながら待っている常之は、近付いてくる父親を全身で感じていることだろう。やがて、ふたりが並んで歩く。どちらも口をきかない。どちらも問題にはふれたくないのだ。街灯が父と子を見送っている。つぎの街灯が迎える。しかし、ふたりは口をきかない。常之は父のもつ折靴を待とうともいわないのだ。いまは、それどころでないのだ。それをまた、父親は切なく感じているのだ。

住宅街の道の静けさが、足もとから破られた。機械的な騒音が、足もとを掬うように襲った。そこは中央線の沿線

だった。灯の集団が足許を疾走した。駅の近くになると、道も明るくなり、商店街となる。

「いいんですか、東京駅まで見送らなくとも……」
と、常之がいった。

「適当な汽車がなければ、いきつけのホテルもある。私のことは気にしないでくれ。それよりも、早くかえって、十分に話しあうことだ。あのひとは、いまそれだけを待ってるだろう」

「おばちゃん、どうしたの」

六畳の茶の間から、姪の景子が顔をだした。無人のような玄関の静けさに、子供も不審に思ったものとみえる。駒子は依然として板の間にすわっていた。駒子は自分をわすれてすわっていた。

「おばちゃん」

子供ごろにも、ただならぬものが感じられたのだろう。いつもならすぐそばにくるのだが、襖をあけたところから顔をのぞかせているだけである。駒子は身動きもしなかった。生きていながら死んでいるようにみえた。

「おばちゃん」

ようやくその声が、耳にはいった。駒子の顔がそちらを向いた。そのときには、いつもの微笑が駒子の顔にあらわ

れていた。それがきつかけとなつて自分のものがばたばたと自分の内部にもどってくるふうであった。駒子は立ち上ると、格子戸をしめた。

「何してたの」

「おばさん、ちょっと考えごとしてたの」

茶の間の灯の下においた顔が、いくら青ざめていた。その目がつり上っていた。それは感情のせいではなく、

「仏さんの顔だ」

と、常之がいつもいつているように持前の目だった。目尻のつり上ったところは、大同の石仏にみかけるものだった。目尻とおなじように口許の両尻も、心もちつりあがり気味である。それが駒子の顔の特色だった。色が白かった。目尻と口尻のきりつとした感じをやわらげるためのように、それ以外の顔の中の造作はひかえめにできていた。ゆたかな髪には、うっすらとウエーブがかかっている。濡れたような髪の黒さだった。それがいっそう肌の白さをひきたてている。五尺そこそこのからだにふさわしく顔も小さかった。

「おじさん、どこへいったの」

「駅まで送っていったわ。もうすぐかえってくるでしょう」

常之の父親の不意の来訪も、その内容も、幼い景子には

わかっていないようであつた。わからないといへば、駒子と常之の三年にわたる関係も、理解していなかった。かくしているつもりはなかったが、駒子も姪の理解を得たいと思つたことはない。

駒子は江馬政策が手みやげの洋菓子函をあけた。

「お皿をもつていらっしゃい」

景子が台所から、洋菓子用の皿とヒメ・フォークを二人分はこんできた。駒子は、

「どれがいいの」

目がかがやかせて、紙函をのぞきこむ景子のおかつぱのゆれるのを、無意識にみていた。このおかつぱが自分の人生に大きな、決定的な影響をあたえるということを、今日の日まで考えてみたことがなかった。そのことを駒子は思つた。駒子は、おかつぱをやさしく撫でた。

景子は、姉の信代の子供だつた。小早川家に嫁いたが、実家にもどり景子を生むと、産後の衰弱がはなはだしく、それがもとで亡くなつた。女の子だつたので、秋元家にひきとることになり、小早川家とは縁がきれた。

信代の死を追うようにして、母親がちよつとした風邪から亡くなつた。女中のお由が、景子の面倒をみた。心算証券の専務をつとめていた父親の茂成が亡くなつたのは、五

年前である。秋元家はたてつづけに葬式を出したような印象をあたえた。が、信代の死から六年間のわが家の出来事であつた。両親と姉をうしなつた秋元家は、にわかにならんとしてしまつた。父親の建てた八間の家が、駒子の手におえないくらいに大きく感じられた。

「由さんが、いてくれるので、私へなへとならずにすんだのだけど、もし私と景子だけだったら、どうなつたでしょうね」

お由は、もう三十年も秋元家にはたらいっている。一度結婚をしたが、良人に死なれてからは、二度と結婚を考えなくなつていた。

「秋元家で私は死水をとつてもらいますよ」

と、お由はいつている。お上手をいうでもなく、ぶつきらぼうな印象をあたえるお由は、性格が一本調子だつた。かげ日向がなかった。信代や駒子の面倒をみたとおなじように景子の面倒をみた。お由は年中、ながめの白いエプロンをきていた。駒子とはときどき、お由がエプロンの下に何を着ているのかと思うことがあつた。

「由さんは？」

と、駒子が、お由のすがたをみかけないのに気がついた。客のかえるときには、必ずすがたをみせる習慣だつたからだ。

「由さん、女中部屋にいるわ」

駒子は、お由の心を感じた。応接間の自分と江馬政策の話をぬすみぎきしていたにちがいないのである。お由にだけには、秘密はできなかった。常之との秘密も、お由は知っている。が、お由の口からそれについていわれたことはなかった。表情にとぼしいお由は、下宿人の江馬常之をきらっているような感じをあたえることもあるが、そうではないのだ。お由は常之を家族のようにあつかっていた。

「由さんにも、このお菓子をおあげたいわ。よんでいらっしやい」

景子が女中部屋へいった。茶の間から女中部屋までには廊下がまがっていて、十五、六メートルもあった。景子の声がきこえていたが、やがて景子もどってきた。

「由さん、たべたくないって……」

駒子は、息苦しくなった。

「由さん、何してた？」

「お部屋のまん中にすわってたわ。こうして両手を膝につつたてて、こわい顔してたわ」

と、景子がまねをしてみせた。その格好は、本来は駒子をとるべきすがただった。お由の上に、駒子はおのれを感じる。

「おばちゃん、たべないの？」

「お口にクリームがついてますよ」

駒子は、たべたいとも思わなかった。お由のように江馬政策のみやげに反抗しているわけではなかったが、食欲をおぼえなかった。

——常之はどうしているのか。

と、気になった。東中野の駅まで父親を見送った常之が、当然かえってきている時間は過ぎていた。

——私と顔をあわせるのが、つらいのだろう。

駒子も、ますます常之の顔はみたくなかった。しかし、ますます顔をみたくと思う。矛盾したものが、おなじような烈しきで胸の中にあつた。

「おじさん、おそいわね」

と、景子があとの洋菓子が気になるような言い方をする。駒子は答えなかった。景子のことばを聞いていなかった。家の中は、静かであった。静かな家の中で、五十五歳のお由が憤怒の炎をもやしているのだ。駒子には、お由がたてる炎のひびきがきこえるような気がする。その火の勢いは、また駒子の胸の中にもあるものだった。

——常之には、父が上京することがわかっていったのだ。それなのに、私にはひとこともいわなかった。

そのことをとりあげて、駒子は怒っていた。が、怒りながら、そんなことは付録にすぎないということもよく承知していた。

——常之とすれば、すなおにいえなかったのだろう。

それも理解できるのだ。

「おじさんのかえりがおそいわ。ちょっとそこまで迎えにいつてくるわね」

何でもないことのように駒子はそういうと、台所口から表に出た。家の中にいることが、息苦しかったからだ。自分ひとりの心の中だけではすまされなかったからである。お由の無言の抗議が、つらかった。お由の顔が、こわかった。あまりに駒子の心をそっくりお由があずかっていくれるからである。それからのがれたかった。

暗い道を中央線の方へ歩いた。だれも歩いていなかった。駒子はいそいでいたが、途中から足をゆるめた。いそいで歩いたところで、うまい解決が待っているわけではなかった。解決どころか、事件はいまはじまったばかりである。

——常之が私より二つ年下ということが、どうして結婚の障碍となるのか。

——私は三年間、常之にみついできた。今日無事に常之のインターンがつづいているのも、みんな私のおかげでは

ないか。

——三年前、常之の学資が中断された。そのときから私は心証証券の外交員となって働くようになった。それも常之のためではなかったのか。

泣きわめく子供が、泣きながら自分を主張するのに似ていた。声は喉のところで消えた。駒子を取りまく闇が、その声を聞いていた。

父親を見送った常之は、無意識に、習慣的に東中野駅の階段をのぼっていた。父の来訪は、わかっていたことである。父は、自分と駒子のたのしい生活の中に爆弾をなげこみ、そのあとが、どのような凄惨なものになろうとかまわずに、かえった。手のつけようのないほど凄惨になるのを、父親はのぞんでいるのだ。常之は、父をうらんだ。父親の独断には、いくらほらをたてても、すぎるということはないはずだった。ぼんやりと駅を出た。父の投げこんだ爆弾をはねかえすだけの気力のないのを、常之は感じていた。その気持が、よけいやりきれなかった。両側にあかるい商店がならんでいるところを歩いていると、店の中を歩いているような錯覚におちる。なが年かよいなれた道だった。この道をとることも、間もなくなくなるのではない。そんなことを常之がのぞんでいるのではなかった。

が、無意識の内に、常之はおのれの運命をまちがいなく感じているようであった。

ひろい通りに出た。車のとおりすぎるのを待っているあいだに、このまま駒子の待っている家にかえるわけにはいかなかった。駒子がやる瀬ない思いで待っているだろうことが、よくわかる。それがわかるだけに、すなおにかえれないのだ。通りを横切ると、また商店街となる。途中で、常之は右にまがった。七、八軒はいったところに、小さい山小舎ふうのスタンド・バーがあった。五、六人も客が入れば、いっぱいになるような酒場である。

「いらっしやい」

なじみのマダムが迎えた。客はいなかった。四十歳すぎで、素人素人したおかみである。小女をつかっている。常之はここで、ひとと待ちあわせたり、友だちをつれてきたりした。駒子もなじみの酒場であった。高級の酒はおいてなかったが、といってひどい安物の酒も売らなかった。常之は、喫茶店のようにつかっていた。

「どうなすったのですか。うかぬ顔していらっしやるが……」

「いや、何でもないのだ」

「奥さん、ここしばらくお目にかかりませんが、お仕事が忙しいんでしょね」

ここでは、駒子は常之の妻となっていた。

「こんなふうには失礼ですけど、もし奥さんがここをおやりになったら、きっとはやるだろうと思いますわ」

「駒子がマダムにふさわしい……？」

「いいえ、奥さん、決して水商売向きというのではございませんよ。ですけど、あの感じ……品があつて、どこかいろっぽくて……そういう感じのマダムがいたら、お店の繁昌はうけあいですわ。近付きにくいような、大家の奥さんでは、マダムはつとまりませんからね。といって、みるからに水商売向きにできているひとは、お客さんはきらうんですよ。こういうお店では、どこか素人っぽさが大切なんですからね」

かつて、マダムがそんなことをいった。それを思い出し、常之はハイボールをのんだ。

「奥さん、お若いですわね」

と、マダムがいった。

「小柄だからね」

「結構二十二、三ですよ」

「それにしては、ませすぎているだろう」

と、常之は笑った。自分の笑いが胸にこたえた。ひどくうつろなひびきだった。

「しつかりしていらいしやるからですよ」

父が心算証券の専務をつとめていたおかげで、父の代からのおとくいを駒子はそっくりひきうけていた。二十六歳の外交員にしては、凄腕とまで評されていたが、駒子ひとりの力でないのはいうまでもなかった。マダムは、常之が二つ年下であることを知らない。おなじ年齢か、一つくらい男が上と思っているらしいかった。

——愛情はともかく、駒子には三年間の恩義がある。恩義をわすれてはならないのだ。

と、常之は二杯目を注文した。そういう考え方が、姑息だったのかも知れない。愛情はふたりに等分のものであり、恩義は一方的なものである。恩義をわすれるような人間にはなりたくないと思う。しかし、そんなものは愛情の一部ではないのか、というふうに大胆に割りきることができなかった。恩義にむくいる道がむつかしいのを、常之は感じていた。むつかしすぎて、むくいきれない絶望感を下感するせいかも知れなかった。そのため愛情と切りはなして考えるのかも知れないのである。

父親の政策は、永年人口十万人のK市の市役所につとめていた。助役を三期にわたってつとめた。戦後相場に興味をもつようになった。儲かったこともあるが、三年前地位を失うほどの失敗をやった。それ以後、人間までが変ったよ

うになった。三年目にみた父の白髪に、常之はおどろいている。常之は、ひとり子だった。

——三年間、ぼくが駒子の世話になっていることを、父は承知していた。しかし、知らないふりをつづけてきたのだ。一本の手紙も駒子にくれなかった。そういう父親だ。

息子が年上の女と同棲していることを決してゆるさず、しかし、女の世話になっていることには目をつぶってきた父親である。父から手紙がきたのは、常之の結婚問題がおこってからであった。

——駒子は父のやり方に、はらをすえかねているだろう。それ以上に、ぼくは父のエゴイストを憎悪しているのだ。

「いつも二杯が限度ではなかったのですか」

三杯目を注文されて、マダムがいった。

「いいんだよ」

「気になりますよ。それに、すこしもいつもの調子におなりでないから」

「のみたいのだ」

「のむよりほかにしようがないのですか。よくありませんね」

そのとき、マダムの視線があらけずりの扉にそがれた。扉をすこしあけて、白い顔のぞいていた。白い顔から常之に、マダムが目をつした。

誘われて常之も、ふりかえった。

「ああ」

と、声にならない声を出した。まさかと思っていた。が、もしかするとういう気持ちも常之にあった。駒子がいって来た。

「いま奥さんの噂をしていたところですよ」

駒子はカウンターの腰のたかい椅子にかけながら、

「どんな噂でしょうね」

と、微笑した。

「何をさしあげますか」

駒子はちらと常之の手もとをみて、

「おなじものを頂戴」

駒子はハイボールを目の高さにあげて、常之の眸をみた。常之は、ほっとしている。駒子の顔は、それほど気色ばんでいなかった。抑えているのはわかるが、この場だけでもたすかったのは、安心である。しかし、あとまわしにされただけであり、困難な、苦渋な時間からのがれるわけにはいかないのである。

「無事におかえりになった？」

「うん、君によろしくといって、かえったよ」

「東京駅まで見送ると、よかったのね」

「ほかに何か用があったのだろうか」

たがいに心にもないことをしゃべっているのを、たがいに感じていた。なげこまれた爆弾のため、目もあてられない惨状を呈しているのをマダムにさとられるのはいやだった。駒子の喉は、氷のつめたさを感じるだけで、洋酒の味はわからなかった。ふたりはそれきり話をしなかった。話ずきの駒子が、今夜は妙にだまっているなどマダムが感じているらしかった。客が二人はいってきた。

「かえりましょうか」

と、駒子がいった。

「うん」

常之が椅子を下りた。常之のあとから扉を出ていくふたりのようすは、たのしそうな若夫婦だった。夫婦してのみにくる客は、この酒場でもめずらしかった。常之夫婦の上には、生活の余裕が感じられていた。

「あんまりおそいで、心配になったの」

表に出ると、駒子が常之の重い心をすくうようにいった。常之はだまっていた。

「駅にもいないんですもの。一本道だから、ゆきちがになることもないと思ったの。きつと、どこかに寄っているのだと思ったわ」

つとめて快活に口をききながら、口調とは反対に駒子の